

## 絵の真偽

### —画像の使用と画像の内容

松永伸司(東京藝術大学)

---

画像(picture)について真偽を問うことが意味をなすケースはしばしばある。文がそうであるのと同じように、絵は本当のことを言うこともあれば、嘘をつくこともある。肖像画や、歴史上の出来事を描いた絵、商品の広告画像などは典型だろう。一方で、真偽を問うことが意味をなさないような画像もある。多くの芸術的な具象絵画作品はそのようなものだろう。

本発表の論点は大きく二つある。第一に、真偽を問える画像とそうでない画像は何がちがうのか。第二に、真偽を問える画像がどのような場合に真になるかをわれわれはどのようにして見分けるのか。言い換えれば、そうした画像の真理条件はどのように特定されるのか。これらの問いに答えることで、画像の働きの重要な一側面が明らかになる。

本発表の議論は以下の流れで進む。まず、画像の真偽と画像の写実性が別の問題であることを示す。写実的だが誤っている絵もあれば、高度に様式化されているが正しい絵もある。また、真偽を問うことが意味をなさない絵でも、写実性を問うことはふつう有意味である。

次に、画像それ単独では真偽を問えるものにならないという主張(Gombrich 1960; Bennett 1974)を検討する。この主張自体は説得的だが、そこで提示されるラベル説—画像を真偽を問えるものにするのは画像に添えられた言語的なラベルであるという考え—は不十分である。むしろ、画像の真偽は、言語行為論を援用することで—つまり画像の使用という観点から—十全に説明できる(Novitz 1977; Eaton 1980)。この考えによれば、画像が発語内行為としての確言(assertion)において使われるとき、その画像は真偽を問えるものになる。

しかし、そこで確言される内容—画像の真理条件—はなんなのか。文を使った確言であれば、その内容は文の命題内容である(Searle 1969)。それゆえ、言語的な確言と同様の説明を画像的な確言にあてはめるには、画像が命題内容を持つことを示す必要がある。先行論者は画像が命題内容を持つことを擁護するものの、具体的にどのようにして画像がそうした内容を持つかについては十分に論じていない。それゆえ、本発表の後半では、画像内容の構造や複層性についての諸理論(Lopes 1996; Nanay 2016; etc.)を参照しながら、確言の内容としての画像内容がどのようなものなのか、またそれはどのようにして特定されるのかについての一般的な理論を提示する。この理論はまた、たとえば絵文字によるコミュニケーションのようなわれわれの日常的な画像使用の実践がどのように成り立っているかを説明するものにもなるだろう。